

No.25

# あすなろだより

2005年12月15日

発行 三重県立小児心療センター <sup>こども</sup>あすなろ学園 広報担当  
〒514-0818 三重県津市城山1-12-3 TEL. 059-234-8700 FAX. 059-234-9361  
MAIL: [asunaro@gaea.ocn.ne.jp](mailto:asunaro@gaea.ocn.ne.jp) URL: <http://www.asunaro.pref.mie.jp/>

## よくわかる子どものこころ講座 その5 虐待を受けた子ども(1)

診療科医師 松居 ゑり子

虐待通告、危機介入が必要な例は後を断たないが、現状は被虐待児や家族へのサポート体制はあまりにも手薄いといわざるを得ない。家庭分離(入院や施設入所等)ができれば問題が解決するという保証はどこにもない。子ども達が社会に巣立つまでの道のりは、あまりにも長くて険しい。その間、子どもにとっては家族ではないけれども、自分のことをわかってもらえた、守ってもらえたという実感を少しでも抱ける出会いがあるかないかが大きな節目にはなるのではないかと思う。家庭内の虐待(身体的、心理的、性的、ネグレクト)によって大きな心的外傷を抱えた子どもが、入院経過の中で、環境療法と精神療法によって少しずつその子本来の持つ輝きやたくましさを発揮していく姿をみることがある。そのためには、子どもが安心・安全を抱ける環境とともに、歪んだ認知から本来の認知に修正できるような治療(意図的な戦略)が必要となる。それと同時に、子どもの現在進行形である学校生活や日常生活を送る手助けも必要である。虐待の追体験を最小限に食い止めるために、大人が黒子のようにになりながら関わり続けるには、実際、多大なエネルギーと時間を要する。子どもの暴走した感情・行動に振り回され、時には無力感に苛まれそうになる。だからこ

そ被虐待児の心理的メカニズムを理解しようとする姿勢と、一人で抱え込むのではなく、子どもに関わる大人同士が共通の認識を持ち合うことが治療維持に必要となる。その際、心理的メカニズムを知識として持っているかいないかで、意識の持ち方、対応の仕方、腑に落ちどころが少しは違ってくるのではないかと思う。虐待による子どもの心理的影響と援助方法は奥が深く、日本ではまだまだ手探りのなところはあある。それでも現在何をすべきか、何ができるかを関係機関同士が連携し協力し合って、次につなげていくことが、いかに重要であるかを痛感する。以下のことが少しでも参考になればと思う。

子どもが心身ともに健やかに成長していくためには、子ども自身が保護されている感覚を抱くことができる程よい枠組みと、愛情のある環境が望まれる。しかし、現実是不適切な環境下にさらされている子ども達は少なくない。侵襲的・反復的・慢性的な被虐待体験によってもたらされるトラウマは、性格や人格を含めた子どもの心理的な諸機能、その後の人生にまでさまざまな影響を与える。

家庭内での虐待を長期にわたって経験している子どもの場合、成長過程で育まれるべき認知や感情が歪められていることが多い。子どもは、その時の自分の心身を守るために、否認や麻痺、自己催眠や解離などといった防御機制を働かせる。しかしそのような防御機制は一時しのぎに過ぎず、